

日本語学習辞典開発のための多義基本動詞の意味構造分析法の確立

-内省分析を中心として*

森山新（お茶の水女子大学）

1. はじめに：目的と背景

本稿は第二言語としての日本語の習得において習得困難な多義基本動詞のうち、「切る」「打つ」「引く」「見る」「上がる」「下がる」を取り上げ、学習辞典開発に向け内省分析法改善のための具体的方案を考察することを目的とする。

語彙学習は学習者の独学に委ねられがちである。そのため学習者は辞書に頼らざるを得ないが、辞書の語義記述は専門家の内省によってなされることが多い。その結果、語義の分類や記述は辞書により各様で、母語話者のような判断基準を欠く学習者を混乱させかねない。

近年、認知意味論の観点から、語義間の拡張の動機づけや意味構造を示すことで、語義を学ぶ認知的負担を軽減しようとする試みが行われている（例えばアルク刊『日本語多義語学習辞典』（森山、2012）、国立国語研究所「理想的な日本語基本動詞用法ハンドブックの開発を目指す研究プロジェクト」（プラシヤント編、2013）など）。しかしこれらでも、その意味分析は執筆者の内省に委ねられ、同じ認知言語学的観点からの辞書でありながらも、やはり語義の記述は辞書間で一致していない。このような中、心理実験的手法での意味分析も行われている。しかしながらこのような方法も、調査対象者が一般の母語話者であるため、語義分類の精度に欠けるなど、限界も指摘され、その結果、内省分析、心理実験双方がその精度を高めると同時に、補完し合う必要があるとされている（森山2015）。こうしたことから内省分析においても、分析法の整備を行い、意味分析とその記述が極力分析者の主観に左右されないような手立てが必要である。

語義の意味拡張は品詞によって、さらには個々の語によって多様であり、拡張のしかたにより分析法も異なる可能性がある。本稿では、動詞に絞って考察を進めるが、具体的には近年研究が行われている6つの動詞（上述）を例に取り上げ、それら研究を展望しつつ、内省分析改善のための具体的方案を提示することを目的とする。

2. 先行研究：成果と残された課題

「切る」については森山（2012b, 2015, 2016b）の一連の研究がある。森山（2012b）では認知意味論の観点と内省分析法を用い、続く森山（2015, 2017）では心理実験という別の手法を用いてその意味構造を明らかにし、両者の結果を比較しつつ、意味構造を明らかにしている。さらに森山（2016b）ではこれらの結果をもとに、動詞の意味構造に対し、内省分析法の提案を行っている。

それによれば、「切る」は切断という具体的動作を表す動詞で、中心義ではガ格・ヲ格・デ格を共起する他動詞である。その意味分析にあたっては、動詞の意味が動詞に共起する項と密接な関係がある点を踏まえ、項構造を重視し、表1のように、各項がどのような名詞をとるのか、動詞の意味がどのように変化するかという2点に注目して分類を行うことで、語義の分類や拡張の動機づけの決定に透明性が保証されるとした。

*本研究は、文部科学省の科学研究費基盤研究(C)「基本多義動詞・形容詞の意味ネットワークとその習得・教育に関する実証的研究」（平成25～27年度、研究代表者：森山新、課題番号25330168）の助成を受けて行われたものである。詳しくは報告書<<http://www.li.ocha.ac.jp/ug/global/mrs/1kaken.html>>を参照。

表1 「切る」の意味構造（森山（2015）より転載）

			ガ格	デ格	ヲ格	動詞
0			人	刃物等の道具	一続きの物	【分断】分断する
↳	5		人		水・空気	【横断】（分断する）+移動する
	↳	6	数値		基準数値	【減少】（分断する+移動する）
	↳	7	人		目標・限界	【超過】（分断する+移動する）
↳	10		人		カーブ・ハンドル	【断行】（分断する）=力強く瞬時的動作を行う
↳	11		人		カード	【混合】（分断する）+混ぜる
↳	1		人	刃物等の道具	密封した物	【切開】分断する+開ける
↳	2		人	刃物等の道具	患部	【切除】分断する+除去する
	↳	8	人		つながり	【中断】（分断する+除去する）
	↳	9	人		不要部分	【除去】（分断する+除去する）
↳	3		人	刃物等の道具	人	【殺傷】分断する+殺傷する
	↳	12	人	（鋭い言説）	人・社会	【断罪】（分断する+殺傷する） =断罪する
↳	4		人		書類	【発行】分断する+発行する

注) 動詞の列の () はメタファー的に意味が拡張していることを示す

表1で示された意味分析法は、意味が共起する項構造と密接な関係を持つ動詞全般に有効である。しかしその一方で、以下に示すように、動詞によりその意味構造は様々な個別の特徴を有しており、それぞれの動詞の特徴にあった意味記述が求められる。例えば森山（2016a）は「上がる」の意味構造を内省分析により明らかにしているが、意味構造分析に際し、まず「理想認知モデル」と「上下メタファー」の考えを援用し、拡張義内省分析を行うことが有効であるとした。

「打つ」「引く」の意味構造については、それぞれ呉（2016）、崔（2016）が、内省分析と心理実験により明らかにしている。これらの動詞は「切る」と同様、動力連鎖を伴う動作を表しており、表1のような項を重視した意味構造が有効ではあるものの、以下に示すように、ヲ格名詞句が被動作主以外の参加者を表したり、動作の結果を表す結果目的語用法などが多々見られたりしており、それらを十分に考慮した意味拡張記述をする必要がある。

さらに「見る」の意味構造については、大西（2015）が内省分析と心理実験によって明らかにしている。「見る」は上記の「切る」などの動詞とは異なり、知覚動作を表す動詞である。そのため、「見る」動作を伴う様々な動作がメトニミー的に派生していることを明らかにしている。従って、そのような特徴を十分踏まえた意味記述を行うことが必要であろう。

3. 意味分析

以上見てきたように、表1のような枠組みはどの動詞にも有効であろうが、同時に個々の動詞の特徴を踏まえた意味構造分析が必要である。本節では6つの動詞を例に、それぞれの動詞でどのような意味拡張が起きているかを、動詞間の共通点と相違点の両面に配慮しながら分析し、動詞の意

味構造の内省分析法や留意点などを示すことにする。なお、以下の考察は、上記の先行研究に言及されていることもあるが、先行研究全体を展望（レビュー）して新たに明らかになったことを加えて整理したものである。

3.1 切る

「切る」の中心義は共起する項を踏まえ、(1)のように記述することができる（森山 2012b、2015）。

(1) [(意志を持つ) 人] が・[刃物などの道具] で・[一続きの物] を・[(力を加えて) 分断する]

一方拡張義は以下の4つに大別することができる。まず「切る」が基本的で具体的な動作であるために、①のように「切る」動作を伴う様々な動作を表すメトニミー用法が拡張している。また「切る」が具体的な動作であるため、②のようにそれに似た具体的な動作、または抽象的動作へのメタファー的な拡張が起きている。さらに③は本来の人（または有情物）を主語とする物理的空間における動作ではなく、数値を主語とする抽象的ドメインでの変化を表すメタファー的用法が拡張している。

さらに森山（2015）では言及がないが、④のようにヲ格が被動作主ではなく、結果を表す用法（結果目的語用法）もいくつか存在している（森山 2017）。

①切る + α （メトニミー）

封を～、胃を～、敵を～、指を～、領収書を～

②メタファー拡張（人が主語となる用例）

具体的動作：風を～、油を～、電話を～、トランプを～、ハンドルを～

抽象的動作：世相を～、縁を～

③メタファー拡張（数値が主語となる用例）

10秒を～、1か月を～

④結果目的語を共起する用例

ネジを～、十字を～、カーブを～

3.2 打つ

具体的な動作を表す「切る」と同様、「打つ」は打撃という具体的な動作を表し、中心義ではガ格・ヲ格（・デ格）を共起する他動詞であるが、拡張義は以下の4つに大別することができる。

まず、「切る」と同様、「打つ」が基本的で具体的な動作を表すため、①のように「打つ」動作を伴う様々な動作を表す用法が発達し、拡張している。また②のように、注目する視点の移動により、ヲ格が「被動作主」ではなく、「道具」「相手」「動作主の役割」などを表す用法が派生的に生まれている。また③のようにヲ格が動作の結果を表す結果目的語用法も多々存在している。さらに「切る」同様、「打つ」が具体的な動詞であるため、④のようにそれに似た具体的な動作、または抽象的動作へのメタファー的な拡張が起きている。

①打つ + α

太鼓を～、釘を～、キーボードを～

②視点の移動により、ヲ格が動作の「対象（被動作主）」ではなく、「相手」などを表す用例

鉄砲を～、敵を～、4番を～

③結果目的語を共起する用例

シュートを～、ホームランを、3時を～、電報を～、蕎麦を～、終止符を～、鼓動を～、将棋を～

④メタファー拡張例

具体的動作：庭に水を～、寝返りを～、

抽象的動作：先手を～、ストライキを～、匂いが鼻を～、心を～

3.3 引く

「引く」は移動を伴う動作を表す動詞で、中心義ではガ格・ヲ格（・デ格）を共起する他動詞である。拡張義は以下のように「打つ」に非常に似ており、4つに大別できる。

まず、「切る」と同様、「引く」が基本的で具体的な動作を表すため、①のように「引く」動作を伴う様々な動作を表す用法が発達し、拡張している。また②のように、視点の移動により、ヲ格が「被動作主」ではないものを表す用法が派生的に生まれている。また③のようにヲ格が動作の結果を表す結果目的語用法も多々存在している。さらに「引く」が具体的動詞であるため、④のように、それに似た具体的動作、または抽象的動作へのメタファー的な拡張が起きている。

①引く+α（メトニミー）

大根を～、カーテンを～、のこぎりを～、油を

②視点の移動により、ヲ格が動作の「対象（被動作主）」ではないものを表す用例

のこぎりで丸太を～、辞書を～、バイオリンを～、(ピアノを～)

③結果目的語を共起する用例

線を～、図面を～

④メタファー拡張例

本の一節を～、5から3を～、腫れが～、潮が～、(身を～)、水道を～、声を長く～、歩行者を～、人目を～、風邪を～、血を～

3.4 見る

「切る」「打つ」「引く」などとは異なり、「見る」は具体的動作や動作の結果としての具体的変化を伴わない知覚動詞である。中心義は「視覚的に知覚すること」であるが、意味拡張は中心義の「見ること」自体から、①のように、ある特別な目的を持って「見る」動作を行った結果、ある意味が付加され、特殊化している。また、②のように「見る」動作は伴いながらも背景化され、むしろ（「見る」を含む）様々な対応、例えば「出会う」「認識する」「診断する」「世話する」「教育する」などを表す動作へと意味が変化している。さらに、「見る」動作は知覚であるが基本的な動作であることから、より抽象的な意味へとメタファー的な意味拡張が起きている。③④のように《体験することは見ることである》《評価することは見ることである》といった概念メタファーに基づいたメタファー的拡張が起きており、そのような動機づけに注目することが意味構造分析において重要である。

①見る+α

テレビを～、野球を～、新聞を～、心電図を～、手相を～

②見る+α（見る動作が背景化され、様々な「対応」を表す動作へと変化した用例）

稀に～秀才、世間を甘く～、患者を～、子供の面倒を～、子供の勉強を～

③メタファー的拡張により「体験する」という意味に変化した用例

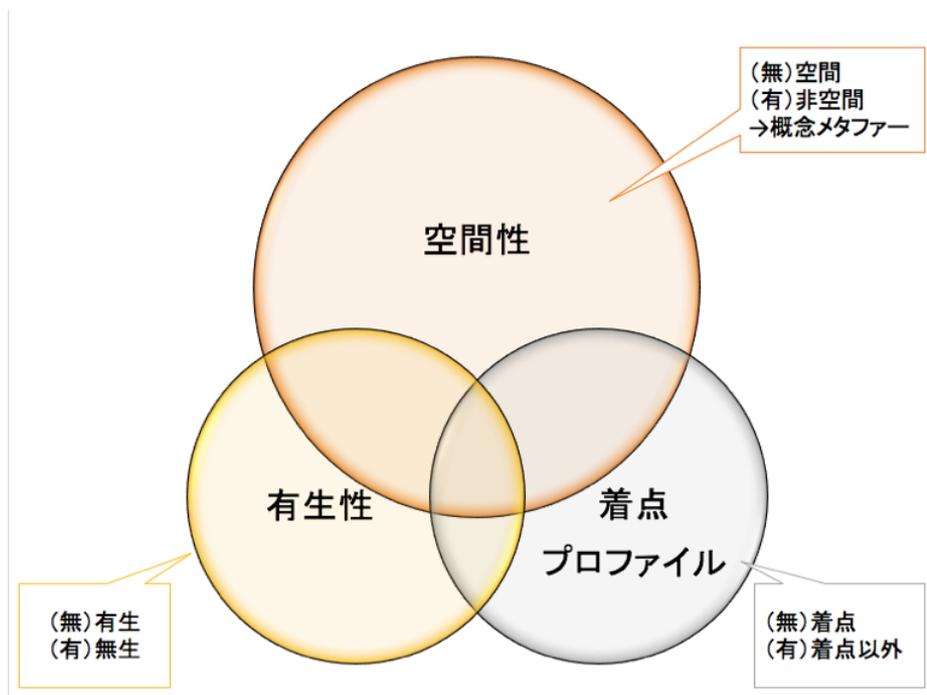
痛い目を～、馬鹿を～、完成を～、一致を～

- ④メタファー的拡張により「評価する」という意味に変化した用例
味を～、湯加減を～

3.5 上がる・下がる

「上がる・下がる」の意味拡張では、図1が示すように、①上下移動の空間性、②移動主体の有生性（自分の意志で移動するか否か）、③着点がプロフィールされるか別の点プロフィールされるかの3要素の有標性により様々な拡張義が生まれている。プロトタイプ義は有生物による空間的な上方移動で、着点がプロフィールされて二格などが共起している用法である（森山 2016a）。

図1 「上がる・下がる」の理想認知モデル（（無）は無標、（有）は有標を表す）



意味拡張の分析に当たっては、これら3点に留意しながら分析を行う必要があるが、とりわけ、空間性、すなわち空間から非空間への意味拡張の分析にあたっては、「上下のメタファー」の概念が役に立つ。但しメタファー拡張の動機づけは言語の別を越えて高い普遍性を有するだけでなく、言語による個別性も存在することから、コーパスデータなどに基づいた実証的研究が必要である。また「上がる・下がる」の意味拡張は必ずしも対称的ではないことも留意する必要がある。

その結果、「上がる・下がる」では「空間性」に関し、以下のような意味拡張が生じているとしている。なお以下で（上）は「上がる」のみ、（下）は「下がる」のみで用いられることを示す。

- ①空間（空間／家屋（上）／食卓（上）／水陸（上）／活動場所／地球（上）／前後（下）／攻撃空間）
- ②出現（上）
煙が～、水死体が～、動画が～、歓声が～、要望が～、収益が～
- ③時間（下）
時代が～

④数量

気温が～、湿度が～、値が～、値段が～、率が～、価格が～

⑤評価

効果が～、成果が～、成績が～、効率が～、価値が～、評価が、コンディションが～、意識が～、テンションが～

⑥完了（上）

雨が～、息が～、バッテリーが～、写真が～、トンカツが～

⑦支配

地位が～、学年が～、女中が～、
アイスクリームを～（上）

4. まとめ

意味構造の内省分析はこれまで、研究者の主観に委ねられることはもちろん、その分類、分析法についても研究者に委ねられてきた。その結果、その意味分析の研究結果は異なり、研究間でその妥当性を比べたり、様々な研究を統合して辞書開発に生かしたりすることが極めて困難なものとなっていた。そのようなことから本稿では対象を動詞に限定した上で、それらに関連する先行研究を展望し、内省分析法の確立をめざした。

その結果、動詞は共起する項が動詞自体の意味と密接な関係があることから、全般的に項構造を重視した意味記述を行うことが有効であるが、それぞれの動詞によって意味拡張のしかた（動機づけ）が異なっており、その点を十分考慮して内省分析を行う必要がある。

今後は分析対象とする動詞をさらに広げると同時に、動詞以外の品詞についても分析を拡大していきたい。

参考文献

- 呉双羽（2016）「日本語多義動詞「うつ」の意味構造」、お茶の水女子大学大学院修士論文
- 崔暁文（2016）「多義動詞「ひく」の意味構造分析-心理実験で内省分析の結果を検証する」、お茶の水女子大学大学院修士論文
- 大西はんな（2015）「多義動詞「みる」の意味構造:心理実験によって内省分析を検証する」、お茶の水女子大学大学院修士論文
- プラシャント編（2013）『日本語学習者用基本動詞ハンドブックの作成』、東京：国立国語研究所
- 森山新（2012a）『日本語多義語学習辞典：動詞編』、東京：アルク
- 森山新（2012b）「認知意味論的観点からの「切る」の意味構造分析」『同日語文研究』27, 147-159
- 森山新（2015）「日本語多義動詞「切る」の意味構造研究 -心理的手法により内省分析を検証する-」『認知言語学研究』1, 138-155
- 森山新（2016a）「上下のメタファーの観点からみた動詞「あがる」の意味構造分析：内省分析法の確立をめざして」『人文科学研究』12, 231-241
- 森山新（2016b）「多義動詞の意味構造分析法の確立をめざして - 「切る」を中心に -」『日本認知言語学会論文集』16, 537-542
- 森山新（2017）「コーパスを用いた日本語基本多義動詞「切る」の意味構造分析 - 認知意味論の観点から -」『人文科学研究』13（近日刊）

< abstract >

A study for establishing methods of analyzing the semantic structure of basic polysemous verbs
for the development of Japanese learners' dictionary:
Focusing on the introspective method

This paper aims to establish concrete methods of analyzing the semantic structure of basic polysemous verbs, by dealing with six Japanese verbs, KIRU (=to cut), UTSU (= to hit), HIKU (=to pull), MIRU (=to see), AGARU (= to go up), and SAGARU (=to go down). It is important but is difficult to learn the basic polysemous words in acquiring a second language.

Needless to say, vocabulary is a significant factor to learn a language, however, language teachers tends to leave vocabulary learning to learners' self-studying. As a result, learners have to rely on their dictionary, but how to describe the meanings of words tends to be left to authors' introspection. Consequently, how to divide each word's meanings and how to describe them are different according to the dictionary used. This fact may confuse learners, who do not have enough ability to comprehend the meanings as reliably as native speakers do.

Recently, several studies have appeared from a cognitive linguistics viewpoint, which show the semantic structure of each word. The structure explicitly indicates not only the relationship between the meanings of a word, but also the motivations of meaning extensions. These endeavors may reduce learners' burden to learn the various meanings of polysemous words. However, they also rely on the authors' introspection, and in consequence, the differences in description of words' meanings between dictionaries still remain. There are also several studies which use the psychological experimental method to explore the semantic structure of a word, where considerable numbers of the native participants are asked to divide the sentences in which a word is used with various meanings, and then the results are analyzed with cluster analysis. However, this experimental method has also indicated some weaknesses. For example, the analyses, which were done by non-expert participants, lack in accuracy even though they are coming from native speakers.

Therefore, both the introspective and the psychological experimental method need to complete each other to complement respective faults. Consequently, the introspective method also needs to be improved in accuracy. Moriyama (2016a) indicates that the extensions of meanings are various by word, and that an appropriate method should be chosen in accordance with how the word's meanings are extended. This study will, at first, review the studies which explored the semantic structure of the verbs mentioned above, and then discuss and propose the concrete methods to improve the introspective method of semantic structure of verbs.